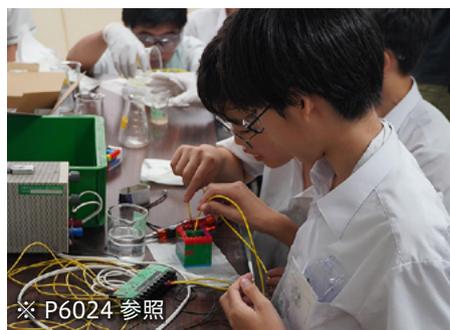


京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P6020 参照



※ P6024 参照



※ P6021 参照

2024.9
No. 776

目次

[大学の動き]

- 令和6年度名誉教授懇談会を開催 6019
- ピノキオコンサート ～大人とこどものための音・学・会 at 京都大学～を開催 6020
- 「アカウントビリティレポート 2024」を刊行 6021
- 京都学派の研究を支援する「西田哲学一千本基金」を創設 6021

[部局の動き]

- 「京都大学宇治おうばくプラザ 第14回たそがれコンサート」を開催 6023
- 宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催 6024

[寸言]

- 想定外を減らす努力 大本 修 6026

[随想]

- 21世紀老年 名誉教授 加藤 立久 6027

[洛書]

- 人の役に立つ基礎研究を目指す：軟骨再生のベンチャー起業を経験して 池谷 真 6028

[探訪]

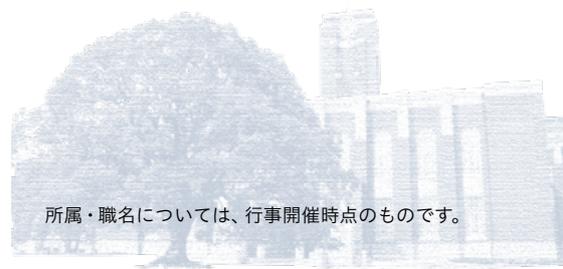
- 理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター～広報課職員が行く～ 6030

[訃報]

- 久保田 競 名誉教授 6036



京都大学



所属・職名については、行事開催時点のものです。

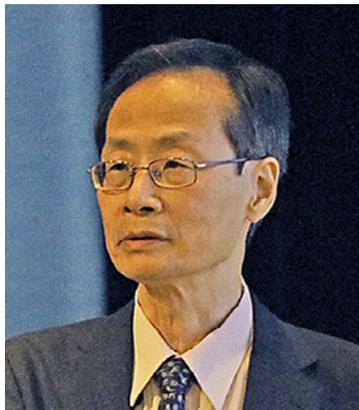
大学の
動き

令和6年度名誉教授懇談会を開催

7月12日(金)に、百周年時計台記念館にて、令和6年度名誉教授懇談会を開催しました。109名の名誉教授のほか、総長、理事、部局長など合わせて147名が参加しました。

名誉教授懇談会では、新たに名誉教授の称号を授与された教授による講話会を行うことが慣例となっており、本年度は石原慶一 名誉教授(エネルギー科学研究科)が「2050年カーボンニュートラルの課題」と題して講演しました。

その後の懇親会は、湊 長博 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、井村裕夫 元総長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告などに話が弾み、盛会のうちに終了しました。



講演をする石原名誉教授



挨拶をする湊総長



乾杯の発声をする井村元総長



懇親会の様子

(総務部(総務課))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

ピノキオコンサート～大人とこどものための音・学・会 at 京都大学～を開催

7月28日(日)に、「学童保育所 京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu)」の開設を記念して、公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団および公益財団法人文字・活字文化推進機構の協力により、「ピノキオコンサート 大人とこどものための音・学・会 at 京都大学」を開催しました。会場の百周年時計台記念館百周年記念ホールには、小学生とその家族約500名が来場しました。

はじめに、稲垣恭子 理事・副学長が開会挨拶を行いました。続いて、ヴァイオリン奏者の後藤 康氏と横島礼理氏によるメンデルスゾーンやモーツァルトなどの楽曲演奏、アナウンサーで絵本専門士の古賀涼子さんによる「弾きがえる」と「くまとやまねこ」の2冊の絵本朗読が行われました。カエルとヴァイオリン奏者が登場する童話「弾きがえる」では、ヴァイオリンの音色でカエルの鳴き声を表現するなど、普通のコンサートでは体験できない演奏と朗読の特別なコラボレーションとなりました。

参加者からは、「舞台との距離も近く、ヴァイオリンの音色も朗読も素晴らしく、感動しました」、「間近でヴァイオリンの演奏を聴いたのは初めてで、ヴァイオリンから奏でられるさまざまな音色に、子どもも興奮していました」などの感想が寄せられ、盛況のうちに閉幕しました。



挨拶する稲垣理事・副学長



古賀氏による朗読



横島氏(左)と後藤氏(右)による演奏



演奏と朗読のコラボレーション

(総務部(総務課))

[目次に戻る](#)

大学の
動き

「アカウンタビリティレポート2024」を刊行

9月20日(金)に、エビデンスベースの大学運営に必要となる情報を集約した「アカウンタビリティレポート2024」を刊行しました。本誌は「人材の育成」、「人材多様性の確保」、「研究の深化」、「社会への責任」、「財務基盤の強化」などに関するデータを経年推移で表すとともに、そのデータの解説を併せて掲載し、本学の現状をわかりやすく紹介しています。

また、昨年度掲載した項目に加え、国際共著論文や共同研究・受託研究など研究に関するコンテンツを追加するなど、より充実した内容となりました。併せて、法人評価の評価指標やサステナビリティに関するデータを可視化し、本学がどのように社会的責任を果たしているかを明らかにしています。

さらに、今年度からは「アカウンタビリティレポート2024」から注目度の高い情報をピックアップし、本学の「いま」を発信する関連小冊子として「TREND FOCUS」を制作しました。「TREND FOCUS」は百周年時計台記念館1階ロビーと広報センター(本部構内正門横)に配架してありますので、ぜひお手に取ってご覧ください。



「アカウンタビリティレポート2024」

「TREND FOCUS」

【関連リンク】

アカウンタビリティレポート

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/data/accountability-report>

(企画部(企画課))

[目次に戻る ↗](#)

京都学派の研究を支援する「西田哲学－千本基金」を創設

本学は、本学の卒業生で「連続起業家」の千本倅生氏から3億円の寄附を受け、哲学者・西田幾多郎と西田の思想を基盤として生まれた「京都学派」の研究を支援するための「西田哲学－千本基金」を6月26日(水)に創設しました。同日、下鴨休影荘(湯川秀樹博士旧宅)にて記者発表を行いました。

本学発の学問分野の一つである京都学派や西田哲学をはじめとした日本の独創的な哲学を

大学の
動き

研究する文学研究科日本哲学史専修は、日本哲学の研究拠点として世界からも注目されています。しかし現在、この伝統ある研究分野は資金不足のため教育者・研究者を補充できないという問題を抱えており、継承された貴重な史料も管理されず未整理の状態に置かれています。そのため、本学では本寄附を原資に独自の基金を創設し、同専修に10年間で計3億円を助成します。

本基金は、同専修における次世代の研究者育成や史料整理・維持、一般公開などに活用します。支援により、本学で生まれた「知」を次世代へ継承・発展させ、社会へ還元していきます。

また、本基金の創設は、4月1日に発足した成長戦略本部による新たな研究支援活動であり、今後も企画・提案型による寄附募集活動を展開し、大学の研究環境を守り、より充実させるための安定的な財務基盤の構築に努めていきます。



左から、湊長博 総長、千本氏



左から、湊総長、千本氏、上原麻有子 文学研究科教授

【関連リンク】

西田哲学-千本基金

<https://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/nishida/>

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)



「京都大学宇治おうばくプラザ 第14回たそがれコンサート」を開催

6月21日(金)に宇治キャンパスの宇治おうばくプラザにて、「京都大学宇治おうばくプラザ 第14回たそがれコンサート」を開催しました。本コンサートは、本学と地域の方々との交流を深めることを目的として、2010年度から行っているものです。

今回は、石川県で活動されているソプラノ歌手の田島茂代氏とピアニストの稲垣 聡氏を迎え開催しました。中谷加奈 防災研究所教授と田中佳代 同支援職員による演奏も行われ、会場には、市民ら約290名が来場しました。また、田島氏の活動拠点である石川県で2024年1月に発生した能登半島地震の復興支援につながることを願い、京都大学生生活協同組合の協力のもと、募金活動も実施しました。

コンサートは山本 衛 生存圏研究所長の開会挨拶および連携協定を締結している宇治市の松村淳子 市長の来賓挨拶から始まり、中谷教授、田中支援職員のヴァイオリンとピアノの二重奏、稲垣氏のピアノに乗せた田島氏の歌唱などの演奏が行われ、来場者は熱心に耳を傾けていました。最後に、片平正人 エネルギー理工学研究所長より閉会挨拶があり、本コンサートは盛況のうちに幕を閉じました。



開会挨拶をする山本所長



来賓挨拶をする松村市長



中谷教授と田中支援職員による演奏の様子



田島氏と稲垣氏による演奏の様子



会場の様子



閉会挨拶をする片平所長

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)



2024年度 京都大学宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催

宇治キャンパスでは、2014年11月に宇治市と連携協力に関する協定を締結し、それ以来、教育、研究、防災・災害対応、広報などの分野において相互に協力し、交流を深めてきました。このたび、同連携協力協定に関する行事を、7月26日(金)、29日(月)、8月2日(金)にそれぞれ開催しました。

7月26日には、「夏休み親子理科教室 in 京大」を宇治おうばくプラザきはだホールで開催しました。同イベントは、親子で本学の最先端技術研究の一端に触れることで理科への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材を育成することを目指して、宇治市内在住の小学校5、6年生児童およびその保護者を対象に開催しています。今回は、今井友也 生存圏研究所教授が「木はどんな生き物?」と題し、「木」がなぜ大きくて強いのかなど、木の謎について講義を行い、19組38名の児童および保護者が参加しました。講義の後の質疑応答では、広葉樹と針葉樹の細胞数の違いから、講師の好きな木は何か?という素朴なものまで、さまざまな質問が寄せられました。その後、田鶴寿弥子 生存圏研究所講師の案内による材鑑調査室の施設見学を行い、参加者が、保管されている2万点の木材を見たり、樹木標本に触れたりする様子が見受けられました。



夏休み親子理科教室の様子(講義)



材鑑調査室の施設見学(夏休み親子理科教室)

7月29日には、「連携協力懇談会(第8回)」を宇治市役所で開催しました。宇治市からは、松村淳子 市長をはじめ関係部署の部長などが出席し、本学からは、宇治・遠隔地キャンパス担当副理事の中北英一 防災研究所教授、宇治地区研究所世話部局長の山本 衛 生存圏研究所長、島川祐一 化学研究所長、片平正人 エネルギー理工学研究所長、堀 智晴 防災研究所長、山口 悟 宇治地区事務部長のほか、宇治地区各研究所事務長が出席しました。懇談会では、



連携協力懇談会の様子



連携協力懇談会参加者

部局の
動き

宇治市内在住の小学生を対象に行っている夏休み親子理科教室等教育関係事業の実施状況や今後の方向性、宇治キャンパス周辺の環境整備、気候変動に伴う防災・災害対応の教育や今後の協力体制などについて幅広く意見交換を行いました。懇談会の後、施設見学が行われ、お茶と宇治のまち歴史公園「茶づな」にて、宇治市役所職員OBの解説を聞きながら、大河ドラマ展を見学しました。

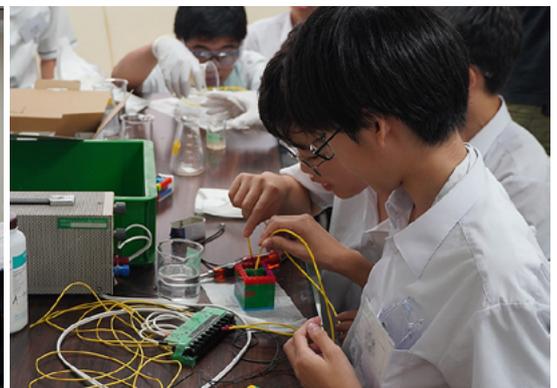


お茶と宇治のまち歴史公園「茶づな」の見学

8月2日には、「中学生理科教室」を宇治地区研究所本館で開催しました。中学生理科教室は、科学の最先端の研究に触れることにより、科学への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材育成を目指し、宇治市立中学校の理科（科学）部員を対象に開催しています。今回は、八木重郎 エネルギー理工学研究所准教授が「LEGOで学ぼう核融合と水素エネルギー」と題して、核融合に関する講義とLEGOを使用して水素製造装置を作成する実験や銀鏡反応実験を行い、宇治市内の3校から23名の生徒が参加しました。4～6名のグループに分かれて実験を行い、電極の材料や作成方法によって、どのグループが水素を一番多く製造できるか対抗戦が行われ、参加者は、実験の結果に一喜一憂しました。



中学生理科教室の講義の様子



中学生理科教室の実習の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

想定外をへらす努力

大本 修



1995年1月17日未明、当時住んでいた兵庫県のマンションでとても大きな揺れを感じました。タンスが倒れてこないかと、咄嗟に隣で寝ている子供達に覆いかぶさった記憶があります。その後テレビでは倒壊した阪神高速道路の映像が映され、私は衝撃を受けました。後に阪神淡路大震災と呼ばれる地震では、多くの方が亡くなり、甚大な被害が発生しました。私の恩師 山田善一教授がテレビで話された「耐震工学は、経験工学です」という趣旨のコメントが、とても印象に残っています。確かに耐震設計基準は、想定外の地震で生じた被害等の経験を基に改訂されるのが一般的ですが、研究者としての無念さもあったのではと思います。

愛媛の田舎で育った私は、自由の学風に憧れて京都大学の門を叩きましたが、当時の京大生のご多分に漏れず、自由な雰囲気甘んじた学生生活を送っていました。転機は耐震工学研究室への配属後、院生の先輩方の叱咤激励を受けながら研究活動に執心しました。大学院では補修、補強をおこなった鉄筋コンクリート部材の動的特性に関する実験的研究で修士論文を書きました。そしてゼネコンに就職後の9年目に阪神淡路大震災を経験し、その翌年現在の会社に転職しました。私は人々の生活を豊かにし、安全を守るためにインフラ整備に関わっているのに、想定外の事象でインフラが壊れたり、機能しなくなることで人命が失われることを、身をもって知りました。そうであればインフラの企画、計画の段階から関われる会社に入り、想定外を減らすことで、より強固なインフラの整備に貢献したいと考えたからです。

阪神淡路大震災以降も、我が国は東日本大震災など多くの地震を経験し、多大な被害や犠牲を払いながら、耐震設計基準や津波対策が見直され、想定外を減らす努力が続けられています。将来発生が予想される東南海・南海地震に対しては、東日本大震災の経験を基に、考えられる地震の規模を想定し、ハードとしてのインフラ整備とソフトとしての避難対策等を組み合わせた現実的な準備が進められています。想定外を減らし、想定範囲内に収める努力がなされているのです。

一方で、阪神淡路大震災後の私の人生にも、その節目には大地震がかかわっています。大阪から東京へ転勤した10日後に東日本大震災が、九州赴任の半年後に熊本地震が起きました。私には阪神淡路大震災の経験がありますので、想定外と慌てることなく、その時々々の立場で、被災地の復旧、復興のための対応を進めてこられたと思います。インフラの整備には限界がありますが、自分の経験をベースに事象を想定し、心の準備をしておくことには限界はないのです。

皆さんもこれからの人生において、想定外の出来事に遭遇することがあるでしょう。その時はしっかり考え、悩み、乗り越えてください。そして、その経験に想像を加えることで、想定範囲を拡げてください。用意周到、より良い人生になると思います。

(おおもと おさむ、パシフィックコンサルタンツ株式会社 代表取締役社長
昭和 61 年大学院工学研究科修了)

[目次に戻る](#)

随想

「21世紀老年」

名誉教授 加藤 立久



20世紀半ばに生まれ青春時代を過ごした私には、21世紀を迎えるとき50歳になることを想像も出来なかった。そんな年寄りにはなりたくない、想像することを拒絶していたような気がする。20世紀の少年時代が霞のかかった曖昧な記憶だったことに共感しつつ読んだコミック「20世紀少年」(浦沢直樹作)を思い出す。しかし人生はアツという間で、21世紀も四半世紀を過ぎ、齢50を20年も過ぎてしまった。そして自分は「21世紀老年」となった。2019年に自分の研究室を閉めた後は、外野席観戦のような立ち位置で複数の現役研究室のお手伝いをするようになった。手伝いをされる若い研究者には「外野席からのヤジ」でしかないのだろうが、手伝う側としては心からの老婆心なのである。

そんな手伝いのような研究の中で、現役の頃は忙しさにかまけて落ち着いて目を通さなかった文献を改めて読めることが有り難い。そんなとき京都大学名誉教授の特権である大学図書館自由閲覧が大いに役立ち、「21世紀老年」への最大の御褒美である。そんな文献検索で、「こんなことが出来るのだ」と感心することがある。中でも、日々進化しているChatGPTには注目させられる。今更説明するまでもないが、対話型の生成系人工知能(AI)サービス⁽¹⁾であり、Web上で英語でも日本語でも、どんな質問に対しても何かしら返事してくれる。退職後は機会の少なくなった英語での科学問答が何時でも出来るのが気に入っている。それは米国の優秀な若い大学院生と科学問答しているようで、よく勉強し物知り顔で饒舌に返事する大学院生を思い出させる。時々嘘をつくので、指摘するとつじつま合わせをしたり、素直に謝ったりしてくるし、「ChatGPTをカスタマイズする」にこちらの素性など必要事項を入力すると、問答の質が向上する。ChatGPTの盲目的利用は危険で避けなければならないが、限界を知りつつ会話すれば良き話し相手となる。よく対話していて、私が理解し彼の誤りを指摘出来る分野が、レーザー光や電磁波を利用した物理化学研究とその応用研究である。特に原子・分子を真空中に浮かせる(トラップ)技術進歩⁽²⁾は目覚ましいものがある。量子論的トラップ技術とも言われる研究であり、近い将来量子コンピュータ実現にもつながるのだろう。昨年には反物質に働く重力検出実験が報告されたが、反物質であるアンチ水素をトラップ後に解放して自由落下させるという単純明快な実験⁽³⁾である。また、重力波天文学⁽⁴⁾の発展にも感心させられる。これらは超高度レーザー光学が発展した賜であり、“アイデア単純なれど実現困難”を克服した研究成果である。

「21世紀老年」の外野席観戦的研究は、現役世代に迷惑をかけることも無いので、しばらくは楽しんでいこうと思う。

[文献] (1) <https://chatgpt.com> (2) *Computational methods in science and technology, Special Issue(2)*, 115(2010). (3) *Nature*, vol.621, 716(2023). (4) *Nature Reviews Physics*, vol.3, 344(2021).

(かとう たつひさ、平成31年退職、元国際高等教育院教授、専門は物理化学)

目次に戻る ↗

洛書

人の役に立つ基礎研究を目指す：
軟骨再生のベンチャー起業を経験して

池谷 真

基礎生物学は私にとって謎解きです。大学進学時、医学部や農学部ではなく理学部を選んだのは、純粋に基礎生物学を深く学びたかったからです。現在、私が専門としているのは「神経堤細胞」という脊椎動物に特有の細胞です。この細胞は、発生過程だけで一時的に出現し、骨・軟骨や神経など、さまざまな細胞に変化することができます。発生中の胚から取り出すことは困難でしたが、iPS細胞から神経堤細胞を作製することができるようになりました。私は、iPS細胞から神経堤細胞を作り、その特性を解析しています。神経堤細胞には移動、分化、細胞死、未分化維持など、さまざまな謎があります。これらを解き明かすことが、私の研究の大きなモチベーションです。



しかし同時に私は、「人の役に立つ研究がしたい」という強い思いを、常に持っていました。基礎研究には謎解きそのものが面白いという一面がありますが、それだけでなく、応用研究の土台になるという重要な一面もあります。基礎的な知見や発見が基盤にあつてこそ、新しい治療法や薬の開発が可能となります。神経堤細胞についていえば、骨や軟骨、神経障害やがんの治療に繋がる可能性もあります。基礎研究の成果が人々の健康に寄与するまでには長い時間が必要ですが、時間をかけてでもその基盤を築くことに大きな価値があると信じて研究を続けています。神経堤細胞の知見が将来どのような応用に繋がるかを考えることは、非常にエキサイティングです。

そして、基礎から応用を具現化するための1つの行動として、私は2023年7月に、膝軟骨の再生を目指したベンチャー企業(株式会社 Arktus Therapeutics)を、軟骨再生の共同研究を長年実施してきた佐賀大学医学部の中山功一教授、京都大学医学部出身の皮膚科医で当時は外資系コンサルティング会社で働いていた大岩智大さん(現、代表取締役)と共に起業しました。アカデミアでは基礎研究はできても、実際の治療に繋げるには限界があると感じていました。多額の資金が必要であったり、様々な技術を組み合わせたり、研究とは異なる能力が求められます。現在、このベンチャー企業にメンバーが揃ってきて、社会実装を加速する準備が整ってきました。企業の活動は、研究室の活動とは異なる多くの種類の挑戦を伴いますが、それだけにやりがいも大きいです。膝軟骨の再生は多くの人々の生活の質を向上させることができると考えています。新しい治療法を世に送り出すため、基礎研究の知識を活かして、成功に導きたいと考えています。

基礎生物学の研究は直接的には目に見えないかもしれませんが、その積み重ねが将来の大きな発見や技術革新に繋がります。基礎に軸足を置きつつ、応用とのバランスを取りながら、これからも人々の役に立つ研究を続けていきたいと思えます。

最後に、文章作成にご尽力いただいたCiRA国際広報室 和田濱様に深謝致します。

洛書

【関連リンク】

池谷研究室

https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/research/ikeya_summary.html

<https://mikeya8.wixsite.com/ikeya-lab>

株式会社 Arktus Therapeutics

<https://arktustx.com/>

(いけや まこと、iPS 細胞研究所准教授、専門は発生生物学、幹細胞生物学)

[目次に戻る ↗](#)

探訪

このコーナーでは、職員が本学の研究施設等に実際に足を運び、現場での取り組みや職員が感じたことをレポート形式で不定期にお伝えしていきます。

京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター
～広報課職員が行く～

熊本県南阿蘇村にある京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター（以下「火山研」という。）は、日本初の大学附属火山研究所として1928年に設立され、阿蘇山をはじめとした九州各地の火山活動の観測・研究を行ってきました。

2016年の熊本地震で、火山研の建物も大きな被害を受けましたが、復旧工事の間も、仮研究棟にて研究が続けられ、「京大ウィークス」も引き続き開催されました。当時のイベントの様子は、スペシャルサイト「ザッツ・京大」に掲載されています。



[動画リンク：[火山研の紹介](#)]

[ザッツ・京大 | 好奇心が煮えたぎる火山研究センター 一般見学会に行ってみた \(2018.04.03\)](#)

京大ウィークスとは

全国に点在する本学の教育研究施設を一般に公開するイベントです。施設見学会や講演会、体験実験、自然観察会などが行われ、大学と地域社会の交流を深めることを目的としています。

2021年2月、特に被害が甚大であった本館の復旧工事が完了し、同年から復旧後の建物での京大ウィークスの開催が実現しました。本記事では、本年7月26日（金）～28日（日）に開催された京大ウィークスの様子や火山研の取り組みなどについてご紹介します。

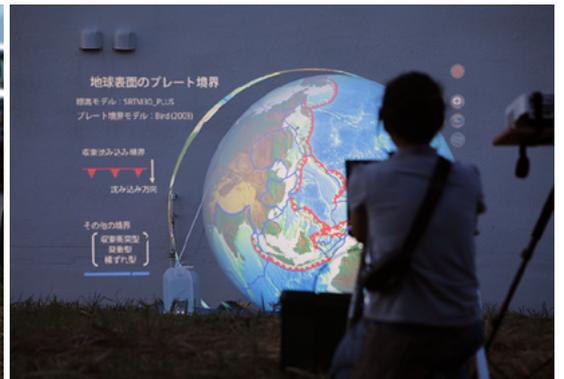
■イベント初日の様子 [動画リンク：[初日イベントの様子](#)]

26日は夕方から屋外でイベントが開催され、満天の星空のもと火山研の本館が美しく浮かび上がりました。球形のスクリーンにプロジェクタで地球や惑星を投影したダジック・アースの展示や火山についての講話が行われ、地域の方々など約20名が参加しました。

ダジック・アースは、地球や惑星についての科学を楽しんでもらうために、学校や科学館、家庭などで、地球や惑星を立体的に表示するプロジェクトで、理学研究科地球惑星科学専攻が中心となって進められています。イベントでは、小田木洋子 理学研究科研究支援推進員が地球上の火山の場所や噴火回数、プレートの動く方向などをダジック・アースを使って説明しました。



説明する小田木研究支援推進員



ダジック・アースに映し出されるプレート境界

また、普段は見ることのできない月の裏側を見ることもでき、参加者は暗闇に浮かび上がる幻想的な光景をスマートフォンで撮影するなどしていました。

[Dagik Earth ダジック・アース デジタル地球儀とは](#)

続いて、施設長である大倉敬宏 理学研究科教授が火山についての講話を行いました。屋外での実施は今回が初めてで、本館の壁面をスクリーンにして火山の映像などを映し出しました。講話の中で大倉施設長は、「私たちが行っていることは、医療行為と比べてみると非常によくわかると思います。地震とか空気振動の観測というのは、聴診器を当てたり心電図を取ること。地殻変動観測は身体測定です。熱観測とか地磁気観測は体温を測ることになりますし、電磁気観測は体脂肪測定になります。問診はなかなかできませんが、身体検査や血液検査をする方と共同研究をしたり、CTスキャンのようなことも行っている。私たちは実は『火山のお医者さん』なんです」と述べました。暗闇に映し出された火山の映像は迫力があり、参加者は真剣に耳を傾けていました。



講話の様子

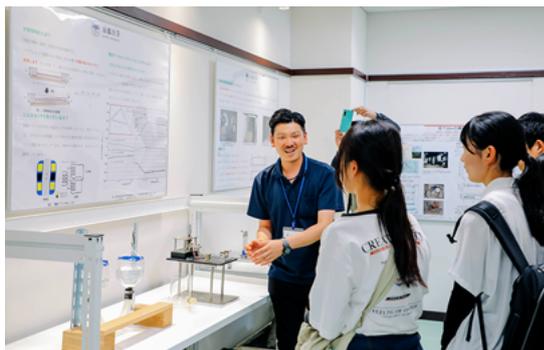


説明する大倉施設長

■イベント2日目の様子

27日は一般見学会が開催され、観測機器や観測結果の紹介、マグマ実験、カルデラ実験などに、子ども連れや高校生など約110名が参加しました。

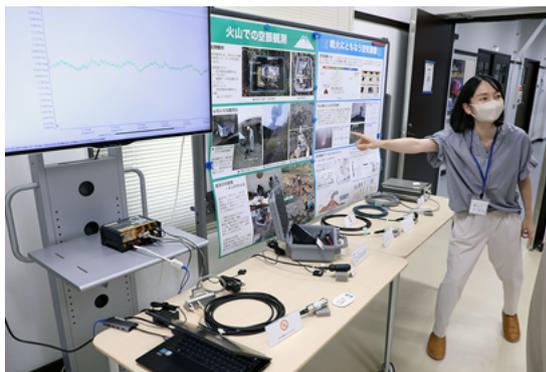
火山研には、地震計や傾斜計などの観測機器が多数設置されています。これらの機器は、火山の活動を24時間体制で監視しており、リアルタイムでデータを収集しています。見学会では、これらの機器の説明とともに、収集されたデータがどのように解析され、火山活動の予測に役立てられているかが紹介されました。また、阿蘇火山の火山灰を顕微鏡で見たり、玄武岩や石英などの岩石に直接触れることができ、多くの参加者の関心を引きました。[動画リンク：[観測機器等の展示の様子](#)]



観測機器の説明を聞く高校生たち



火山灰や岩石の展示



研究内容を説明する石井杏佳 助教



机を叩いて観測機器の反応をみる広報課職員

また、参加者はカルデラ実験やマグマ実験にて火山のメカニズムを体感しました。マグマ実験では、七輪を用いてマグマを作り、その迫力を間近で感じることができます。マグマを急激に冷やすことでできる結晶はとともきれいで、参加した子どもたちはうれしそうに持って帰っていました。[動画リンク：[カルデラ実験](#)、[マグマ実験](#)]



大学院生によるカルデラ実験



ココアパウダーと洗濯のりで再現されたカルデラ



マグマ実験に興味津々な高校生たち



砂を高温で熱してマグマを再現



でき上がったマグマ



きれいな結晶に喜ぶ子どもたち

■施設長インタビュー

大倉施設長はイベント開催の目的について、「火山研は1928年から観測を行っていますが、案外地元の方に知られていなかったり、火山に対する理解がまだ広がってなかったりします。地元の小さい子どもたちをはじめ、あらゆる方に本イベントへ参加いただいて、火山について知ってもらえたらと思います」と述べました。

イベントには、阿蘇ジオパークガイドさんがボランティアで参加されており、ブースの案内や阿蘇の地形の説明などをされていました。「私たちの研究を一般の方々へお伝えしたいのですが、なかなかお伝えする機会がありません。そこで、阿蘇ジオパークガイドさんにご協力いただき、私たちの知識をお伝えする勉強会を設け、ガイドさんから一般の方々に自然科学や災害に関する知識をお伝えいただいています」とのこと。

今後の火山研での研究について、「噴火の規模や様式の予測がまだまだできていないことが課題です。近くに火山があり、繰り返し観測ができるという地の利を生かしながら、阿蘇だけでなく広い範囲で災害軽減につながるような研究が展開できれば」と述べました。



火山研についてこやかに話す大倉施設長



阿蘇の地形を説明する阿蘇ジオパークガイドさん



大倉施設長をモデルに、火山研スタッフの小山晴子さんがデザインしたTシャツ。「がまだせ南阿蘇」は熊本の方言で、「頑張ろう南阿蘇」という意味



火山研のファンで、主に高度経済成長期のビルを愛でる活動をされている「熊本ビル部」が火山研協力のもと作成した冊子。建物のディテールや被災当時の様子などが詳細に記載されている

■最後に

京大ウィークスでは、ほかにも多くの魅力的なイベントが開催されています。各地で行われる公開講座や見学会に参加することで、京都大学の研究活動をより深く知ることができます。イベントの詳細や参加方法については、[京大ウィークスの公式ウェブサイト](#)をご覧ください。

今後開催予定の京大ウィークスイベント一覧

都道府県	開催施設・イベント名	開催日
北海道	北海道研究林	
	自然観察会「秋の森の生態系」	10月5日(土)
岐阜県	飛騨天文台	
	飛騨天文台自然再発見ツアー	10月12日(土)～14日(月)
愛知県	ヒト行動進化研究センター 犬山キャンパス	
	2024年度京都大学犬山キャンパス一般公開	10月26日(土)
滋賀県	信楽 MU 観測所	
	信楽 MU レーダー見学ツアー 2024	10月5日(土)
	流域圏総合環境質研究センター	
	流域圏総合環境地質研究センター施設見学会	10月19日(土)
	生態学研究センター	
	一般公開「ミジンコはすごい!色んな仲間:尖って伸びる:水を綺麗に:遠い過去から蘇る」、「葉を巻く虫の巧みなワザと植物との関わり」	11月2日(土)
京都府	宇治川オープンラボラトリー	
	公開ラボ「災害を起こす自然現象を体験する」	10月19日(土)
	宇治キャンパス	
	京都大学宇治キャンパス公開 2024	10月19日(土)～20日(日)
	附属農場	
	京大農場オープンファーム 2024	10月26日(土)
	芦生研究林	
	一般公開自然観察会	10月20日(日)
	上賀茂試験地	
	上賀茂試験地 秋の自然観察会	10月26日(土)
	舞鶴水産実験所	
	教育研究船「緑洋丸」による舞鶴湾の生物採集およびスライドショー上映	10月26日(土)
	花山天文台	
	花山天文台特別公開	11月2日(土)

都道府県	開催施設・イベント名	開催日
大阪府	複合原子力科学研究所	
	アトムサイエンスフェア講演会 2024	10月5日(土)
	アトムサイエンスフェア実験教室プラス 2024	10月27日(日)
	阿武山観測所	
	阿武山観測所「特別公開」地震・防災研究の最前線	10月13日(日)～14日(月)
和歌山県	瀬戸臨海実験所	
	公開ラボ・施設見学「白浜の海の自然と発見」	10月19日(土)
	和歌山研究林	
	ミニ公開講座	10月26日(土) (予備日11月2日(土))
	潮岬風力実験所	
	大気観測の実体験	10月26日(土)
岡山県	岡山天文台	
	岡山天文台特別公開	10月26日(土)
徳島県	徳島地すべり観測所	
	四国を襲った大地震を学ぶジオツアー	11月9日(土)
山口県	徳山試験地	
	周南市・京都大学フィールド科学研究教育研究センター連携公開講座	10月19日(土)
大分県	地球熱学研究施設	
	施設公開・講演会・ライトアップ	10月25日(金)～26日(土)
宮崎県	幸島観測所	
	幸島野生ニホンザルの観察会	11月4日(月)

(広報課 大田桃子、千原恵介)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、久保田 競 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

久保田 競 名誉教授

久保田競先生は、令和6年6月29日に逝去されました。享年92。

先生は、昭和32年3月東京大学医学部を卒業、同年4月から昭和39年3月まで同大学大学院在学、昭和39年10月東京大学医学部脳研究施設講師、昭和42年9月京都大学霊長類研究所助教を経て、昭和48年8月同教授に就任し、神経生理研究部門を担当されました。この間、昭和39年3月には医学博士の学位を東京大学から授与されました。昭和57年1月から昭和59年1月まで、そして平成2年1月から平成8年1月まで2度にわたり京都大学霊長類研究所長を務められました。平成8年1月に本学を退官し、京都大学名誉教授の称号を授与されました。本学退官後は平成8年1月に日本福祉大学教授に就任、特別任用教授、大学院特別任用教授、大学招聘教授を歴任されました。この間、平成9年4月から平成15年3月まで総合研究機構長、また、平成11年4月から平成15年3月まで大学院情報・経営開発研究科長を務められました。平成20年3月に同大学を定年退職された後、同年4月から国際医療技術専門学校副校長を務められ、令和2年4月には同校の名誉校長となりました。



先生は、永年にわたって、大脳生理学ならびに霊長類学の研究と教育、後進の指導に努められるとともに、京都大学霊長類研究所の黎明期から尽力し、所長として同研究所の発展に大きく貢献されたほか、京都大学総合人間学部の設立にも尽力されました。先生の研究室は、京都大学を含む多くの大学教授を輩出しています。また、心理研究部門の室伏靖子 教授や浅野俊夫 助教授らと、研究対象としてチンパンジーの導入を実現され、その後の比較認知科学分野開拓のための礎を築かれました。

先生の永年にわたる研究は、大脳生理学の広い範囲にわたりますが、特に記憶保持に係るサル前頭前野の働き、高次運動中枢としての運動前野の発見などが、国内外から高い評価を受けています。また、可塑性神経回路の特定領域研究を主導され、日本の脳研究を牽引されました。また、これらの教育研究や大学行政等における顕著な業績が評価され、平成23年に瑞宝中綬章を受けられました。

(ヒト行動進化研究センター)

[目次に戻る](#)